

## 「苦難を予告する」

2014年11月07日

マルコによる福音書 13章 14節～23節。 「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら——読者は悟れ——、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。このことが冬に起こらないように、祈りなさい。それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。そのとき、『見よ、ここにメシアがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。だから、あなたがたは気をつけていなさい。一切の事を前もって言うておく。」

聖書は、現代の私たちには難解な言葉が多々ある。それはまず、今から二千年も前に書かれた文書だから、物の考え方や表現方法が全く違う。そして、神や信仰という見えない事柄を著そうとする時、神話的、寓話的な手法を取らざるを得ない。殊に、イスラエルでは黙示文学という表現形式があり、天変地異、奇妙な怪物などを描き、宗教的真理を著す。黙示は「覆いを取る」という意味であるが、私たちには「覆いが取れず」分かり難い。マルコ福音書 13章は「黙示文学」の手法で書かれている。

主イエスは大きな苦難を予告している。「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら」という句は、紀元前2世紀のアンティオコス四世エピファネスを指している。彼はエルサレム神殿にローマの主神ゼウス像を飾り、安息日や割礼の規定を禁止し、豚肉を食べさせ、ユダヤ教を撲滅しようとしたシリアの王である。彼のような「憎むべき破壊者」が立った時、① 山に逃げよ。② 屋上にいる者は下に降りるな。③ 家の物を取り出そうと中に入るな。④ 畑にいる者は上着を取りに帰るな。⑤ 身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸である。⑥ 冬に起こらないように祈れ。以上の6つを語り、天地創造以来、経験したことのない苦難が襲うと言っている。

この苦難は紀元70年に起きたエルサレム崩壊の惨事を言っているのではないか。マルコ福音書の著者はエルサレム崩壊を確かに経験している。ローマの大軍がエルサレムを包囲した。当時は火薬爆弾がなかったので、堅固な城壁で囲まれた町は兵糧攻めで攻略した。歴史家ヨセフスは、城内に立て籠った人々は革をかじり、泥水をすすり、我が子を殺して食べるような飢餓状態になったと伝えている。城内に入らず逃れた者は助かった。沖縄戦では、日本軍を頼って、一緒に南下した人々が大きな犠牲を負った。上記の警告は、エルサレムに留まるのではなく、何も持たずに急いで山に逃れよと言っているように聞こえる。そして、その苦難の最中に、メシア（救い主）のうわさが広まり、現われる。しかし、彼らは人を惑わす偽メシア、偽預言者であるから、信じるなどと言われる。

主イエスは世の終わりの終末前は、世界は混沌とし、不条理に満ち溢れるが、冷静に落ち着いて、神への信仰を全うするように勧めている。どんなに世は乱れても、神による最後の救いの完成時を信じる者は動じず、この終末時を希望を持って待つ。